

寺報 善 巧

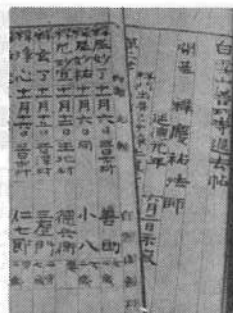
発 行

〒 938 富山県下新川郡
宇奈月町浦山 4 9 7
白雪山 善 巧 寺
☎宇奈月(07656)(5)-0055

寺
ごみ
七月

一日 音沢講
十四日 永代祠堂会 十六日は
二十日 中陳講

故人を縁としてお寺に参り、生
かされて生きるよろこびを聞き
ひらきましよう。



善巧寺過去帳

二十四日 日曜学校開校式

夏休みを機に、浦山に仏教こ
も会が誕生します。小学生のみ
なさんふるってご参加を！

二十九日 真夏の夜の一泊法座
午後八時から翌朝七時まで、寺
に泊って聞法とつたで楽しく過
しましょう。

講師は大阪の利井明弘師
三十一日 日曜学校



修復なった経蔵の屋根

七月十四日より
七月二十日まで

永代祠堂会

講師・里村了学師

十四日、十五日
十七日、十八日
十九日、二十日
はいずれも午後
一時半より。
十六日は中陳講
で午前中からお
勤めあり。

七月十四日から祠堂会が始まり
ます。申す迄もなく祠堂会は、全
門徒の法要です。毎年、二十人か
ら三十人の方が御亡くなりになる
のですから、私が、お葬式をつと
めただけでも、千人近くになりま
す。私は、善巧寺二十一世に当る
のだから、これ迄、御亡くなりにな
った方の総数は、大変な
ものです。

此処に、白雪山善巧寺、
過去帳の第一冊があります。
その序に、「宝暦十三年九月
白雪山善巧寺釈僧銘謹題」と
誌された、漢文があります。
総字数百五十で、最初
の九字は、次のように読ま
れます。

「生死如海涯而不可測」

人間の生死の不測を序文
の最初に掲げて居られるの
です。

さて、此の過去帳には、
聖徳太子及び龍樹、道綽、
天親、善導、曇鸞、源信、源空の
七高僧の御命日。見真大師以下勝
如上人迄の御名前、次には、善巧
寺開基 釈慶祐法師以下、歴代住
職の法名、事績。次いで、善巧寺
塔頭法輪寺、照行寺の歴代住職の
法名が、誌されています。
これに続いて、御門徒の方々の、

祠堂会を迎えて

法名、死亡年月日、村名、氏名が
記入されています。
最初に出て来るのは、次のよう
に書かれています。

萬治三、庚子年。釈浄立。六月
三日。浦山村。長兵衛。

私のような、歴史の専門家で無
いものには、萬治と云う年号から、
何を引き出しているのか分
りません。手元にある、黒
板勝美編、国史研究年表に
依ると、萬治三年は、將軍
家綱の治世、一六六〇年に
当ることが分ります。三百
十七年の昔です。

此の過去帳に名前を連ね
た凡ての方々の御法要が、
祠堂会なのです。頁を繰っ
て見ると、村の名だけでも、
昔と今とは変って了つてい
ます。併し、凡ての人々は、
御縁につながっているの
です。

それは、御開山聖人の御
流れを頂戴させて頂いている御縁
であり、第十一世明教院僧銘法師
を先達と仰がせて頂く御縁である
のです。此の有難い祠堂会法要を、
今年も、皆様と御一緒に勤修致し
ます。何とぞ、賑々しく、御参詣
下さい。

(雪山 俊之)

室と筆と

明教院
僧 銘 伝

① 書物に記された僧銘師

ソウヨウ「僧銘」本願寺派の学匠。富山県善巧寺の人。初の名は靈関、法名慶叟（けいそう）字は子練、号を空華廬、雪山、仰峯等という。僧様の門人で、空華三師の一人である。天明三年十月、六十一歳にて寂し、明教院と諡せられた。——法蔵館「真宗辞典」

◇ ソウヨウ 僧銘 真宗本願寺派の学匠。字は子練、空華廬または雪山と号す。俗姓は渡辺、越中市江村に生まる。十一歳同国新屋村明光寺の靈潭（れいたん）について出家し、法名を靈関（れいかん）といい、後、今の名に改む。家塾にありて修学し、毎日栗の実を食とし、あえて鶏卵・蛙蛤などの生類を食せざりき。十九歳（あるいは二十一歳）同国下新川郡浦山村善巧寺に入りてよつぎとなる。ついで京都に出でて宗学を研究し、遂に僧様門下の上首となる。様の寂するや、その秘籍を悉く付属せ



られ、かつ住寺和泉界の祐貞寺を、ゆずらる。三十一歳始めて学林に仏典を講じ、後、数度付講を勤め、さらに無量寿經、愚禿鈔、正像末和讃等を講ず。某年東嶺の智蓮（ちせん）本尊義を著するや、斥謬（しやくびよう）一卷を撰してその説を駁す。四十一歳命を拝して錦華殿に侍講し、安永二年賞として寺格余間に進む。五十一歳の時飛騨の古川に異安心の諍あるや、復た命を拝してこれを治む。宗主嘉賞して、九字、十字の尊号を書して賜わる。六年四月様師の遺著法事讃註七巻を校刻し、題して甄解（けんげ）という。天明三年秋、越中富山の客舎に病を得、九月法事讃念仏を修して傍人に助和せしめ、二十五日以来一心称仏し、十月二日寂す。寿六十一、諡して明教院という。後、明治四十四年十一月鏡如宗主、さらに特別賞与第一種一等を追賜せらる。著作に教行信証一一滴録十六卷・三帖和讃集義方軌十二卷・無量寿如来会随聞記並同統編十卷・末灯鈔管窺録六卷・安樂集里鼓・観念法門甄解・愚禿鈔温古録各五卷・観經疏散善義記・阿弥陀經受信録、正信偈聞書等——竜谷大学編「仏教大辞彙」

真宗関係の辞書には明教院のことを以上のように記してある。つぎに僧銘師の伝記だが「古徳事蹟伝」「先哲遺事」「真宗僧宝伝」などを参考にして書かれた「浄土真宗法話全集（巻七）」には、つぎのようにある。



釋 僧 銘

明教院僧銘師は越中国下新川郡浦山村、白雪山善巧寺第十一世の住持である。法名を慶叟（けいそう）といい、子練とあざなした。享保八年に同郡市江（いちえ）村に生まれた。父を彦左衛門といふ師の幼名を「与三吉」といった。明光寺靈潭師は当時地方の碩学であつたが、ある時彦左衛門の家にいつて、幼童の与三吉を一見して、いかにも非凡の器であることを見ぬいていたので、宗学を学ばせたいものだと思つて父母に相談してつれて帰り、即日剃髮得度させた。そして靈関（れいかん）と名づけて自分の養子とした。もつとも靈潭師にはこれより前三人の子があつただけけれども、特にこの子の非凡を見込んで養子としたので、少しも実子と区別することなく、年令の順に兄弟としておいた。靈関はそれで、四人のうち三番目であつた。それは靈関十一才

の時のことである。

もつとも一説には、与三吉が道傍に水遊びをしていたところへ靈潭師が通りかかつて、見どころがあつたと見えて、有無をいわさず自分の乗つていたかごの中へ入れてつれて帰ってしまった。そのあとで父母は行方をさがして、あわてて明光寺へたづねていったら、もうその時は頭を剃つてしまつていたといつてある。話としてはこの方が面白いけれど、事實はどうであらうか。

ともかく師は少年時代から非常に僧の生活をした、いつも栗の実を食して、卵や魚介のようなものは決して食へなかつたとつたえられる。そして養父の家塾にありて日夜書をひもといて研讀に余念もなかつた。たまたま生まれた家に帰つても決して泊つたりすることを好まず、すぐ帰つてしまつた。二十一歳の時にいでて善巧寺のよつぎとなつた。それから京に出て宗学を研究し、ついに僧様門下の首位を占めるようになった。僧様師は深く彼を愛重していたから、死するに際して、その所有していた秘書珍籍をことごとく僧銘師に付嘱し、さらにまたその住持たる界の祐貞寺をも譲り与えてこれをつがしめたのである。これによつてもいかに師の知遇のあつたかが知られる。

さて、わたしたちはいま、辞書と伝記によつて、明教院僧銘師の面影の一端をおぼろげながら知る

寺 ごとみ

八月

一日 石田・生地・中新講
七日 日曜学校
十五日 善巧寺こども盆踊り大会

なつかしい浦山の寺の盆踊りが三法要の記念事業として復活します。明教院ゆかりの大イチョウの下で、踊りの輪が二重、三重に：ちようちんチカチカ、太鼓がドンドコ：。日曜学校のこどもたちがけい古を重ねた「しらん音頭」をご披露します。お父さんやお母さんはどんな踊りを見せてくれるかな？



そしてこの日、寺にはおじさんたちの「宇奈月夢を語る会」が発足。ワタ菓子やアイスクリームなどの夜店を出そうと夢んでいます。楽しみです。

ことができました。二百回忌まであと五年、その間にこの欄においてこれをもとにして、僧銘師の人となり、生い立ち、そして業績などについて、その足跡を追いつながらさらにくわしく調べて、生き生きとした明教院さまをよみがえらせてゆきたいと思つていきます。

三法要

- ・宗祖 700回忌
- ・御誕生 800年
- ・明教院 200回忌

右図は完成予想図。
下図は書院と門徒お茶所の間取り。

できた！書院・お茶所の青写真

門信徒のいこいの場

来秋には完成へ

三法要の建設関係記念事業の主要が、六月二十四日ひらかれた第二回理事会でまとめ、門信徒の方から注目を浴びていた、門徒お茶所と書院の建設は来年着工の見通しとなりました。

この日の理事会に提出された建設委員会の三法要建設事業計画によると、建設関係の五カ年間の予算、およそ二千万円のワク内において、門徒お茶所の建設とこれまで「御殿」と呼ばれていた老朽書院の建て替え事業、離れ廊下の修理、およびこれまでに着工完成なつた経蔵、本堂の屋根の修復などが組み込まれています。

なかでも、門徒お茶所、書院の建設は、今度の事業の目玉ともいえるもので、

寺の意向だけでなく委員会全員一致で、まず具体的な青写真を——とその作成をいそいでいたものです。この日あさ、ようやく出来上がった設計図を前に、理事会ではおよそ二時間にわたって熱っぽい意見がかわされ、これからの寺の教化活動を推進してゆくためにも、門信徒のいこいの場でもあるお茶所は必要であり、法要のさいの最少限度の部屋数を考えても、書院の建設はなくてはならないもの——という結論に達しました。

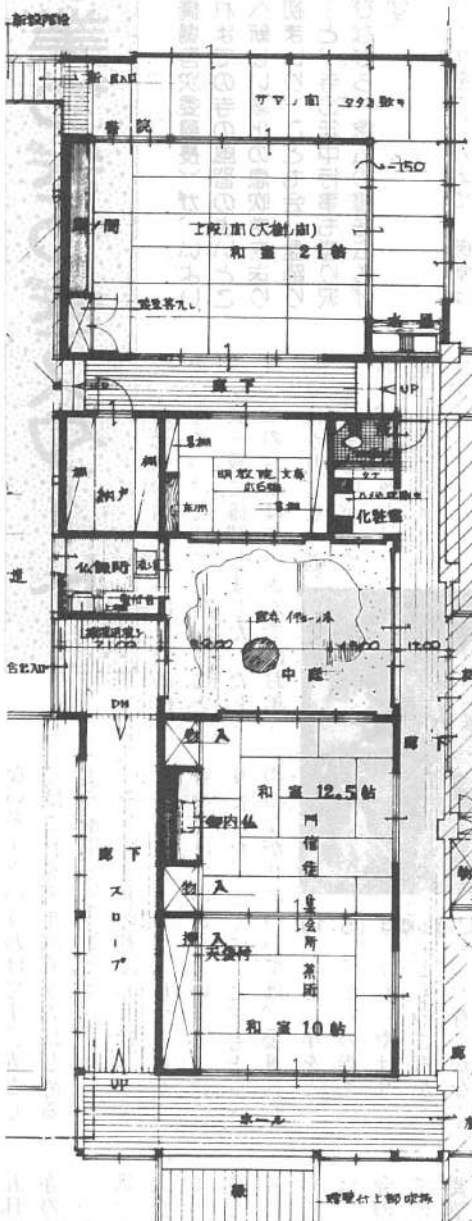
一方、書院の方は、裏庭に面した部屋に法中方が一室に会することができ、さらに門信徒の方の仏前結婚式披露の間に利用できるという二十一帖の大座敷。廊下をへだてて北側には、これまでお客僧を泊める部屋がありました。これを明教院の二百回忌を記念して「明教院文庫」と名付けて、書斎に合わせて、明教院師の関係書物を収納する文庫を設置するようになっていきます。

また、これまで寺にはなかったお仏飯所も今度は本堂わきにできることになり、寺での法事のさいは、花やお供え物などをおさめる場所としても利用できるようになる予定です。

この書院とお茶所の建て坪は約六十坪、華美にならず、質素をむねとした一般家庭の座敷でいどの仕上げになれば十分であろうとの案にまともりました。

着工は、現在の物価の上昇などを考えた上で早急にという意見が多く、予算と募財との関係を慎重に検討した結果、おそくとも来年末までには完成させるのが適当であるとの結論に達しました。

なお、この工事のために庫裡と本堂の間をとりこわすときに、その間にレッカー等の機械を裏庭に入れて、離れ廊下の修復をするのが経費の面から有利であろうといわれ、来年は、いよいよ三法要の建設関係の事業がツチ音高くはじめられ、秋ごろまでには、ほぼ完成に近づくことになりそうです。

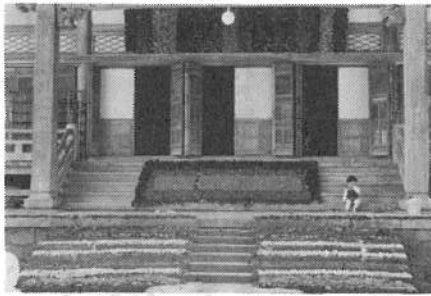


建設事業計画を審議する第二回理事会(6・24)

動き出した教化委員会

三法要

・宗祖 700回忌
・御誕生 800年
・明教院 200回忌



チューリップの花御堂 (5・1)

そんな雰囲気なかで、午後二時から委員会がはじまりました。委員長のあいさつ、あと、事務局の方から寺の年中行事の見直しと、新しい行事の持ち方について説明がありました。

まず、お講については、門信徒の方の協力

第一回目の教化委員会が開かれたのは、五月一日お講の日。そしてこの日は善巧寺ではじめての催し、「初まいり」があつたのです。

前日から近所のおばあちゃんや奥さん、それにこどもたちも加わって、一万個を越えるチューリップの花がざりをこしらえて、御堂は文字通りの「花御堂」。

そして当日はお講のあつたあと正午すぎから、かわいい赤ちゃん、小学校前のお子さんが、お母さんやおばあちゃんに手を引かれての初まいり。御堂にあつまつたこどもたちは花をそなえ、もみじのような手で合掌。おつとめのあ

と、住職からおじゆずと記念品のプレゼント、記念写真もパツチリ撮って、それはそれはのしい一日となりました。

善巧寺教化委員会（橋場啓次委員長）が、いよいよ動き出しました。これまでの寺の風習のよいところは残し、さらにそこへ新しい教化の息吹きを送り込もうとしています。初まいり、こども会、盆踊り、そして秋には聞法旅行と、寺の年中行事も盛り沢山。いろんなご縁を結びながら、念仏の輪を広げてゆこうというわけです。

で、お念仏の輪を広げるために、末長くつづけてゆこうということ。を全員一致で確認しました。たしかにこのお講はさいきんではお年寄りばかりでなく若い層にまで広がっており、その数も月を追ってふえてきています。



もみじのおじゆず (5.1)

次に、このほかの寺の年中行事として、一月の元旦参り、御正忌報恩講、三月の春の団体参拝、七月の永代祠堂会、八月の盆参りがあり、これらについては例年通りつづけてゆくが、その折々のお世話方が不足していることがあげられ、若い人たちにも積極的に働きかけてゆくと同時に、本山だけでなく、寺への念仏奉仕団を編成しては—との意見も出しました。

次は新しい行事としては、今年からはじまった一月十五日の成人式に歎異抄を贈ること。三月には彼岸会。四月には聖徳太子の御命日に寺で太子講をはじめはとうい

う声が出ました。太子様にゆかりの建設関係の方にお参りいただき、そこで寺の建物の痛みや、修理箇所についても検討をいただくという事であれば、寺にとっても門徒にとってもありがたいことでは

ないか—というわけです。寺としてはこれを来年四月からはじめるよう準備をすすめることにしました。そして五月の初まいりは、こどもたちのおまつりとしてこれからもつづけてゆこうということになりました。とくに、こどもと寺とのつながりについては、委員長か

らも「年をとつてからの寺まいりも、やはりこどものころからのお育てがなくは—」という話があり、この初まいりだけで話がある、この

善巧寺年中行事

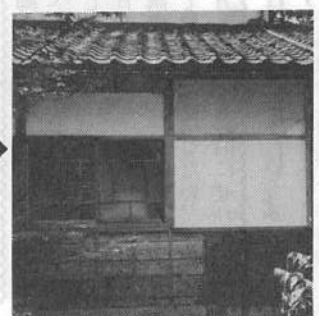
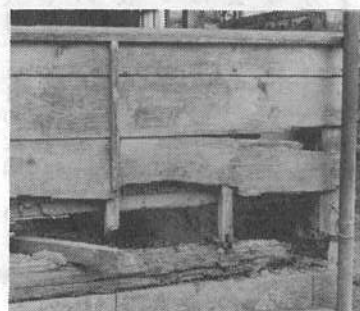
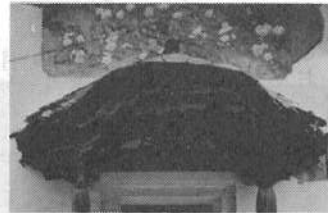
- 4 1・下村講 16・栗虫、内山講 ◎太子講
- 5 1・音沢講・初まいり 16・音沢講
- 6 1・東狐、上野講 16・音沢講
- 7 1・音沢講 14~20祠堂会 (16・中陳講)
- 8 1・石田、生地、中新講 ◎盆踊り
- 9 ◎布教大会 ◎秋の聞法旅行
- 10 1・板屋講 16・三日市講
- 19・20報恩講 (下旬より門徒報恩講始まる)
- 11 1・愛本新講 16・浦山新講
- 12 1・下立愛本講 16・浦山講
- 31・除夜会
- 1 1・元旦会 13~16御正忌 ◎成人式
- 15・下村講 16・浦山、栃屋、熊野、大橋講
- 2 1・浦山講 16・下立講
- 3 1・浦山講 16・栃沢講・春の団参

(◎印は記念事業)

りっぱになりました

第一期修理 工事終わる

さる三月の建設委員
会で決まった第一期の
雪害修理工事は、四月
末から五月にかけて板
屋の門徒、島田工務店
によって行われ、本堂
基礎固め、大屋根、経
藏屋根の修復、土蔵前
の修理などが、写真の
ように完成しました。
なかでも経藏の屋根は
ひときわ目につき、お
参りの方からも「りっ
ぱになった」と評判で
す。



五月八日 曇。

食堂で軽い朝食。平河町から地
下鉄・国電と乗り継いで武蔵小金
井駅下車。今年の東京門徒報恩講
廻りの第三日である。御当主が、
改札口に出迎えに来て下さってい
る。タクシーで五分。新築の邸宅
のお座敷に迎えられ。先ずお仏
間、報恩講のおつとめ。おばあさ
んは、昨年と変らぬ御元氣な声で、
昨夜は、一家総がかりで、浦山か
ら大切に持って来た押しすしの枠
で、すし作りで夢中だったと話し
て下さる。故郷の浦山の、あの方
この方の噂話に花が咲き、思わず
ビールのグラスを重ねている内に
午後一時になる。

門徒に向う。御当主は、板屋の出
身。故郷を出て、あちこち廻り、
東京生活も、六十年以上になる。
お兄さんは、現在、老齡尚、饒樂(か
くしやく)としていて
善巧寺御同
行の筆頭で
ある。
埼玉県有
数の工業団
地の一面に、
N製作所の
名を掲げて、
盛業中である。
老夫婦、若夫婦、
孫達と、去年と
変らぬ歓迎に、
何時もながら恐
縮する。工場の
施設を見せて頂
く。此処も公害
対策で

急行バス	
上野	妙
二野	妙
三野	妙
四野	妙
五野	妙
六野	妙
七野	妙
八野	妙
九野	妙
十野	妙
十一野	妙
十二野	妙
十三野	妙
十四野	妙
十五野	妙
十六野	妙
十七野	妙
十八野	妙
十九野	妙
二十野	妙

住職日記

色々と御苦労があるようだ。帰館、
午後七時。
五月九日 快晴。
亡弟の墓参。鎌倉駅十二時に辛
うじて間に合
う。会するも
の。弟未亡人
の。弟長男、次
男、次男は、
今年一月結婚
で初々しい新
妻同伴。次い
で、私の妹。
これは、大阪からはるばるの参詣
バスで鎌倉霊園に行く。山や台地
を切り開いて、全山、墓、墓、墓の
盛観である。墓前にて勤行。妹が、
声高く正信偈の助音をして呉れる。

終つて、鎌倉駅近くの料亭で寛
ろぐ。一皿一皿が、私のような田
舎暮しの身には勿体ない美味、珍
味である。此処二三年、実弟、
義兄、義弟と身うち不幸が続い
ている。「今度こそ私の番だ」と云
う私の科白に、妹の曰く、「お兄さ
んのような悪党は一番長生きして、
皆んなに嫌われるよ」。
そう云えば、二年前死んだ旧友
の法要と文学碑除幕式に、此の二
十日から、九州能古島迄出かける
予定だ。帰館七時。
霊園に香たなびきて 夏の照り
ふるさとの押し箱の香や
夏座敷

寺 ごよみ

九月

下旬 お講もなくさびしい九
月。今年は下旬に秋の旅行を計
画しています。一案は、親鸞聖
人七不思議の旅。そしてもう一
つは、吉崎御坊から山陰へ妙好
人のふるさとをたずねての法悦
の旅。どちらにするかは八月の
お盆までに決める予定です。
お楽しみに。

7月24日から
毎日曜日

集まれ!! チビツ子……

「こどもたちのふれあいの広場」『うらやま・日曜学校』が、いよいよ、この七月二十四日から開校されます。おつとめとしつけ、法話や童話、それにうたやレクリエーションなどを盛り込んで、心豊かなこどもたちを育ててゆくのが目的で、この日曜学校は夏休みの間、毎週日曜日の午前中に開かれます。

「うらやま・日曜学校」開校

この日曜学校はさる五月一日にひらかれた教化委員会で「ぜひ開校を」の声があつたことから三法要記念事業のひとつとして発足するものです。

日課は日曜日の午前十時開校。おつとめ・法話とつづき、そのあと正午までゲームやうたのレクリエーション。先月末には少年クラブ

ひと口 お焼香

○焼香の卓の二・三步手前で御本尊に一礼し(写真①)卓の前まで進みます。
○そのまま香を右手につまんで香炉のなかへ一回だけ入れられます。(写真②)



○そこで合掌・念仏・礼拝します。(写真③)そして二・三步さがって一礼して退出します。
○お香は香りをたくことによりって環境を清らかにするもののおしただかなくてよく、りんをたくともいりません。また香をたくまに合掌はしません。

夢を語る会にはいませんか

「宇奈月夢を語る会」というオモシロイ会が発足します。青年時代は遠く過ぎ去り、そろそろ中年に足をかけるかかけないか、というおじさんたちの集まりです。おじさんたちには夢がない。毎日ぐったり疲れて、生きていく充実感といったものがまるでない。そんなおじさんたちがゼンマイを巻きなおして、いかに生きろくべきか、を語り、世の中を語り、夢を語って、明日への生きる力をよみがえらせる―そんな会です。

一月ごろから浦山の寺で若院と高島有哲さん、それに西中正毅さん、八木秀雄さんなどが月に一・二度寄り合つては夢を語り、酒を酌んでいたのです。その場でふと話題になったのは、城端の寺を中心にした「夢を語る会」のこと。その世話をしているタレント作



しんらん文庫

寺の事務所に「しんらん文庫」ができました。小学校のこどもから老人まで、だれでもが読める親鸞さまの本や仏教のお話、法話集やテキスト、お経の本やお作法の本までなんでもそろっています。いつでも気軽に覗き下されい。

家の永六輔さんが「宇奈月にもつくれば」とすすめてくれたことから、急に「やろやろやろ」となった次第。

八月十五日の盆踊りの日までに広く会員を募って、働き盛りの若者のみのも多い会にして、盆踊りの夜に発会式をやろうというコンタン。入会資格は皆無。やあやあとはがらかに語り合えるハッピーな会にしたいと思つていますので、気軽に参加して下さい。入会希望の方は寺へ御一報を。

真夏の夜の一夜泊法座に

日時七月二十九日夜八時から三十日朝七時まで。涼しい寺の御堂での一夜泊法座です。

二十九日は夜八時から、下立愛本地区のおつとめ勉強会のみなさんのお正信偈の発表会。つづいて、大阪・行信教校の利井(かがい)

みんなそろつてお参りしましょう

明弘師の法話 あとは夜のおやつを食べながらの座談とつたの会。そしてみんなで一緒に泊つて、三十日朝は五時からおつとめと、晩天講座。お仏飯の朝がゆをいただいて解散というしだい。若い方も朝の出動前にぜひ……。

合掌

いよいよ三法要の委員会が動き出し、寺にも活気がでてきました。雪害の修理もほぼすんで、建設関係では書院と門徒お茶所の青写真ができました。

一方、教化面では、年間行事、記念事業もはじまつて、日曜学校ができ、盆踊りも行われ、開法の旅やら一泊法座やらと盛り沢山です。

あるおばあちゃんが「明教院様の法事までおられようかのお」と五年後の法事を心待ちにしていらつしやいましたが、法事というものは五年後にコロナとあるのではなく、じつはもうはじまつているのだとご理解いただきたいのです。毎日毎日を生きていきと、よろこびの中に生きてゆく。そのよろこびの表現としていろいろな行事を催してゆくわけですが、三法要をお迎えする心の器をつくるためにもぜひぜひ、積極的に寺の行事に参加して下さい。寺はあなたの心のふるさとなのですから。

